

自然は食物のつながりでありたっている

動物、植物を問わず、すべての生物に長いあいだ保たれてきた「持ちつ持たれつ」の自然界の大原則は、ことばを交えれば、お互いに食べる食べられるという関係の中で生活しているということです。これを「食物連鎖」といいます。

植物は、太陽エネルギーを吸収し、水と炭酸ガスから炭水化物をつくり、栄養物と体の材料を自分の力でまかなうことができます——つまり、他の生物の助けを借りないで生活ができます。いっぽう、植物を食べる動物は、植物の栄養を利用し、植物を頼りに生活します。こういう動物は、植物なしに生きていくことはできません。また、動物を食べる動物は、さらに植物を食べる動物によって生活していますが、これは、間接的には植物に頼って生きていることになります。

自然のたくみ「食物連鎖」

動物の中には、生物の死がいやふんを食べる生活しているものもいます。落葉や枯木を食べる幼虫もいます。また、バクテリアなどの微生物も、動植物の死がいやふんを栄養分にしています。これらの生物によって、死がいやふんは次第に分解され、やがて雨水とともに土の中に溶け、ふたたび植物の根から吸収されて植物の体の一部になり、そしてまた、その植物を食べる動物の体の一部となっています。

このように、生物のあいだの作用がうまく働き、生物をとりまく環境とつり合いがとれている限り、自然は、全体としてバランスをもった「持ちつ持たれつ」の社会をつくっているのです。このことは、食べる食べられるという関係で結びつけられている生物の、それぞれの種類が、他の生物の数を調整する役目を果たしていることを意味します。

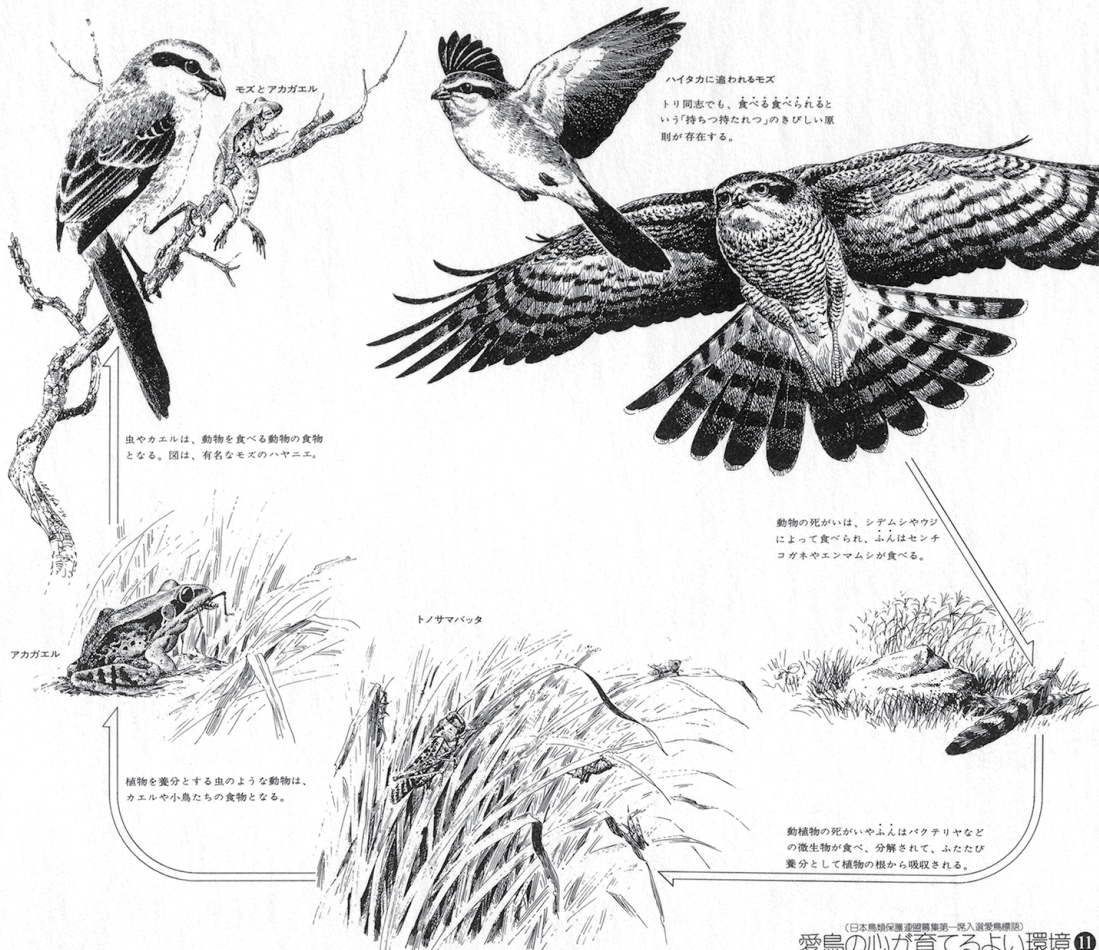
しかしヒトは、すでに、この自然界のしくみを、こわしつつあるのではないのでしょうか。



財団法人 日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

●この広告は、財団法人日本鳥類保護連盟の指導を得て、サントリー株式会社からシリーズとして制作するものです。

自然界のしくみ「持ちつ持たれつ」



ハイタカに追われるモズ
トリ同士でも、食べる食べられるという「持ちつ持たれつ」のきびしい原則が存在する。

虫やカエルは、動物を食べる動物の食物となる。図は、有名なモズのハヤニエ。

動物の死がいは、シデムシやウジによって食べられ、ふんはセンチコガネやエンマムシが食べる。

植物を養分とする虫のような動物は、カエルや小鳥たちの食物となる。

動植物の死がいやふんはバクテリアなどの微生物が食べ、分解されて、ふたたび養分として植物の根から吸収される。

(日本鳥類保護連盟第一投入型養鳥環境)
愛鳥の心が育てるよい環境①

●「美しい自然」館に小鳥をのびのびと暮らすための環境づくりとして、サントリー株式会社からシリーズとして制作するものです。